

氏 名	龍神 慶
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	博士 甲第722号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	平成27年 3月10日
学位論文題目	Behavioral Changes in General Practitioners Towards Chronic Obstructive Pulmonary Disease over Five Years: An Observational Study. (一般かかりつけ医の COPD に対する 5 年間の行動変容 ー観察研究ー)
審査委員	主査 教授 三浦 克之 副査 教授 安藤 朗 副査 教授 山本 学

論文内容要旨

整理番号	728	氏名 (ふりがな)	龍神 慶 (りゅうじん やすし)
学位論文題目	“Behavioral Changes in General Practitioners Towards Chronic Obstructive Pulmonary Disease over Five Years: An Observational Study” (一般かかりつけ医の COPD に対する 5 年間の行動変容 —観察研究—)		
【目的】 COPD の進展を防ぐという観点からは罹患患者の早期発見が必要不可欠であるが、実際に診断されている患者はその一部分のみである。こうした理由の一つとして、患者のかかりつけ医 (general practitioner、以下 GP) が COPD に対し適切に対処できていない可能性があげられる。本研究の目的は、5 年間にわたる調査期間を通して、COPD に対する GP の知識や行動の変容を明らかにすることである。			
【方法】 2005 年から 2010 年の間に、滋賀県医師会の協力のもと、滋賀 COPD 研究会が中心となり、県下に勤務する医師を対象に COPD に関する種々の教育的活動を行った。教育的活動として、COPD の診断や治療に関する講演会、禁煙外来・スパイロメーターの使用に関する講習会などを行った。その上で、2005 年、2006 年、2010 年の 3 回に同一内容のアンケート調査を行った。調査対象は滋賀県医師会に所属する医師全員であり、回答は郵送または FAX で匿名化された状態で回収した。			
【結果】 回収されたアンケート数はそれぞれ、711 通中 216 通、731 通中 269 通、856 通中 326 通であり、回収率はそれぞれ 30.4%、36.8%、38.1%であった。3 回の調査期間の間に、ガイドライン上第一選択薬として推奨されている薬剤の一つである長時間作用型ムスカリン受容体拮抗薬 (long-acting muscarinic antagonist、以下 LAMA) を処方する医師の数は有意に増加していた ($p < 0.001$)。しかしながら、COPD の診断に必須であるスパイロメーターの保有率や COPD に関するガイドラインの認知度については、調査期間中に有意な変化は認められなかった。内科を標榜していると回答した医師に限定して解析を行うと、やはりスパイロメーターの保有率には有意な変化は認められなかったものの、ガイドラインの認知度については調査期間中に有意に増加していた ($p < 0.01$)。さらに、多変量			

- (備考) 1. 論文内容要旨は、研究の目的・方法・結果・考察・結論の順に記載し、2千字程度でタイプ等で印字すること。
2. ※印の欄には記入しないこと。

解析の結果からは、GPの標榜科、自らのクリニックで管理しているCOPD患者の数の多寡（5人以上かどうか）がCOPDに関連するガイドラインの認知度に影響を与えており（OR：それぞれ7.3、12.9）、また、GPの標榜科、スパイロメーター保有の有無、自らのクリニックで管理しているCOPD患者の数の多寡（5人以上かどうか）がLAMAの処方に影響を与えていることが明らかになった（OR：それぞれ2.9、2.3、2.3）。

【考察】

本研究はCOPDの診断・治療に対するGPの5年間における行動変容を明らかにしたものである。GPのスパイロメーター保有率に有意な変化は認められなかったものの、LAMAの処方率はこの期間中に有意に増加していた。また、解析対象を内科標榜医に限ると、COPDに関連するガイドラインの認知度に有意な上昇を認めた。多変量解析の結果からは、GPの標榜科、自らのクリニックで管理しているCOPD患者の数の多寡がCOPDに関連するガイドラインの認知度に影響を与えており、また、GPの標榜科、スパイロメーター保有の有無、自らのクリニックで管理しているCOPD患者の数の多寡がLAMAの処方に影響を与えていることが明らかになった。

GPのスパイロメーター保有率に有意な変化がなく、またスパイロメトリーの結果を重要だと考えるGPが一部であったことから、彼らがスパイロメーターを実際には使用していない状況が推測される。その理由として、検査に時間を要すること、検査自体に習熟していないこと、結果の解釈にある程度の経験を要することが考えられる。スパイロメトリーのGPへの普及率は世界的に見ても十分とは言い難く、その機能を補完する目的で種々のデバイスが開発、検討されている。GPの現場ではこうした手段によりスクリーニングを行い、引き続いて専門家による詳細な検討を行うという段階的アプローチも有効性が期待される。また多変量解析の結果から、COPDに対する処方やガイドラインの認知度はそのGPの背景が影響を与えていることが明らかになり、今後啓発的活動を行う際には、参加者の背景を考慮に入れて活動を行うと、より高い効果が得られる可能性が示唆された。

【結論】

今回の調査期間中に、GPのLAMA処方率は増加し、また内科標榜医においてはCOPDに関するガイドラインの認知度も上昇していた。今後、GPの背景も考慮した啓発的・教育的介入を行うことが、種々の活動をより有効なものにするものと思われる。

学位論文審査の結果の要旨

整理番号	728	氏名	龍神 慶
論文審査委員			
<p>(学位論文審査の結果の要旨) (明朝体 11ポイント、600字以内で作成のこと。)</p> <p>COPDは日本における死因の第9位、世界では第4位に位置する疾患で、我が国のCOPDに対する医療費負担は年々増大傾向にあることから、大きな問題となっている。しかしながらCOPD患者のうち、実際に診断を受け、医療機関で治療を受けているものはごく一部に過ぎない。早期発見・早期診断が望ましいが、そのためには、かかりつけ医(GP)の担う役割が強く期待されている。</p> <p>こうした背景を受け、発表者らは2005年から2010年の5年間における、COPDの診断・治療に対するGPの知識や行動の変容について検討する目的でアンケート調査を行い、以下の点を明らかにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 5年間の調査期間中で、COPD患者にガイドラインで推奨されている吸入型LAMAを処方するGPが増加した。 2) 内科を標榜しているGPでは、COPDに関するガイドラインの認知度が増加した。 3) 多変量解析の結果からは、この両者には、施設の標榜科や管理しているCOPD患者数、ガイドラインの認知度が独立して寄与している事が明らかになった。 4) COPDの診断に必要なスパイロメーターの保有率には変化が認められなかった。 <p>本論文は、COPDに対するGPの知識や行動の変容について新しい知見を与えたものであり、最終試験として論文内容に関連した試問を受け合格したので、博士(医学)の学位論文に値するものと認められた。</p> <p style="text-align: right;">(総字数 580字)</p> <p style="text-align: right;">(平成27年 2月 2日)</p>			